は減少して子供の世界にのみ見らるゝに至るのである。吾人は尙古き動機に刺激せられ形式に於ける興味を以て意識的に文字を作るのである、吾人は今日では倫理的、宗教的、審美的若しくは實際的の定つた目的を以て話を書くのである。(Partridge: Story-Telling in School and Home に據る)。

『トプシイ』(一)

――英文學に現はれたる子供(三十四)――

岡田みつ

(トプシイは米國の奴隷の生活狀態を書きました有名の小說アンクル・トムス・キャビンの中に出て來る黑奴の一少女であります。)

或日オフイリヤ(此家の主人の從姉で家の取締りに來て居る婦人)が家內の雜用を爲てゐると、セント・クレーア(主人の姓)が階子段の下から呼んで居るのが聞こえた。

「一寸降りて御いでなさい。見せる物がある。」

オフヒリヤは、手に縫物を持つて降りて來ながら、

「何です」と言つた。

「奧向きになつて買つたものがあるンで……一寸御覽なさい。」とセント・クレーアは言ひながら、八九歲の黑女兒を引き出した。その少女は極色の黑の性の黑奴で、その丸い光つた眼は、ガラス玉のやうにギラついて四邊の物をキョロ〳〵見廻してゐた。座敷の立派さに驚いた爲めその口は半分開いて、白い光る齒が見えてゐた。その縮れた短髮はいくつかの三の組に編まれて、四方八方に突き

立つて居た。その顔には狡猾な風もあり、また、いやに眞面目腐つて居る處もあつた。衣服はといへば、汚ならしい破れだらけのがたつた一枚で、その裝で、愼ましやかに垂れてゐる風情は、多少物めいた感じを人に與へるのであつた。

「何んだつて斯んなものを連れていらしつたのです。」とオフヒリヤは惘れて居た。

「貴女に然るべく敎育して貰ふつもりでさ。なか〳〵面白い標本でせう。こら、トプシー。」と犬でも呼ぶやうに口笛を吹いて、その少女を近づけて、

「唄つて御覽、そして一寸踊りも見せるンだ。」

トプシイは、性惡さうに滑稽けたやうにギラギラ眼を光らせ、金切聲で黑奴の唄を唱ひ出した。手と足で拍子を取つて、クル〳〵廻つたり、手を拍つたり、膝を打ち合せたりした揚句に、一つ二つ宙返りをし、唱ひ仕舞に汽笛のやうな變な音を長く立て、それから眞直に立つて、以前の通りに手を垂れて、さもおとなしさうに澄してゐた、……

但し横目を使つてジロ〳〵四方を見て。

オフヒリヤは、驚き惘れて聲も出さずに默然と立つてゐるのを、セント・クレーアは、惡戯好きの心に、興がつて眺めて居たが、軈てトプシイに對つて、

「おい、之が御前のこんだの御主人だぞ。御前をこの方に進呈るんだから、よく勤めるんだぞ。」

トプシイは眞面目に「はい」と答へながら眼はキョロついて居た。

「おとなしくするんだぞ。分つたか。」とセントク・レーアが念を押すと、

「はい」と言つてトプシイはやつぱり手を行儀よくしたまゝで、眼だけを光らせ居た。

「一體之は何の爲です。」とオフヒリヤは言ひ出した。「此處の家には、こんな小供が澤山居て、踏み付けないでは歩けない程ではありませんか。朝起て見ると、一人が戸の影に寢てゐる、一人がテーブルの下から黑頭を突き出してゐる、又一人が

筵の上に轉がつて居る、而して皆、欄干の間から齒を剝き出したり、顏を歪めたり、臺所の床の上で轉々したりしてゐる。それを何だつて、又此子を連れていらしやつたのです。」

「貴女に仕込んで貰ふんだ……と言つたではないか。貴女は、始終敎育が〳〵と言ふでせう。だから極新しい標本を進上して、貴女の思ふ通りに、然べるく敎へ込んで御覽なさいといふ積りなんです。」

「こんな子を要りませんよ。もう手に餘つて困る程あるんですもの。」

「其が信者の御規定文句だ。何々會なんていふものを設けて、宣敎師をこんな人間ばかり居る處へ一生涯派遣して置きながら、こんな奴を自分の家へ引取つて、自分で宣敎の勞を取るとでもなるとやれ汚くて不快だとか、世話が燒け過ぎるとか、種々の事を言ひ出す。」

「私や、さういふ意味に考へなかつたのです」と

オフヒリヤは、餘程心を和げて「さうですね、これが眞實の宣敎事業かも知れない。」と少しは厭さうでなくトプシイを見た。

セント・クレーアは、オフヒリヤの弱點を押へたのであつた。オフヒリヤの良心の命通りにするつて事には几帳面な人なので、

「唯ね、此子を買ふ必要はないと思つたんです。家に有り餘る程居ますもの。」

セント・クレーアは、オフヒリヤを小蔭に呼んで「失敬〳〵、僕の下らない議論は何の意味もないンです。實は、かうなのさ。彼奴は、下等な飲食店を出してゐる飲み拔け夫婦の許に居たのですがね。その店の前を通る度に、彼奴が打たれたり恐られたりしてギヤア〳〵泣いて居るのを聞くのが厭なのです。それに、彼奴は怜悧で滑稽けて居るから、何かになるか知らんと思つて買つたのです。差上ますから、純ニユー・イングラレド式の敎育をして、何者になるかやつて御覽なさい。僕には

そんな働きはないから貴女に一つやつて貰ひたいンです。」

「では、出來る丈して見ませう。」と答へて、オフヒリヤは黒小女に不氣味さうに近づいた。

「まあ穢なくて而して半分裸ですよ。」

「下へ連れて行つて、唯かに洗はせて、衣服を着せなさい。」

そこでオフヒリヤは、臺所へ連れて行つた。

「且那樣がまた一人連れていらしつて、何になさるンだらう。」と料理女は言ひながら、新來者を冷淡に眺めてゐて「私の足の邊へも來させないよ。どうしたつて」と言ひ放つた。ロザとジエンといふ黒奴の小間使も

「へーン、傍へ寄つてはいやだよ。且那樣は何だつてこんな下等な黒人が御入用なんだらう。」と言つた。

フオヒリヤは、誰も此小黒女に構つて呉れるものが無いので、止むを得ず自分で手を下して洗つてやつた。厭さうにジエーンも多少は手傳つた。此子供の背中や肩に打擲された痕があるのを見てはさすがにオフヒリヤも哀を催したが、ジエーンは痕を指して、

「御覽なさいませ。よつぽどの惡餓鬼だつて事が分るでは御座いませんか。必然此奴には骨が打れますよ。こんな少ぽけな奴は大嫌ひ。且那樣が御買ひになる氣が知れない。」と言つた。

その「少ぽけな奴」は穩順しく、陰氣らしく今の批評を聞いてゐた、唯ジエンの耳にはめて居る耳飾りをチロッ〳〵と時々見やつてゐた。衣服はちやんと改め、髪を短かく切つてしまつたので、トプシイも少しは人間らしくなつた。オフヒリヤは如何して躾を始めやうかと心で考へながら、

「何歳だへ、トプシイ」

「知らないよ」と大口開いて齒を見せる。

「何歳だか知らないかい。誰も御前に言つて聞かせないのかい。御母さんは何といふ人だえ。」

「そんなものは無いや。」とまた大口を明く
「御母さんなんか無い？どういふ意味にんだへ。何處で生れたか。」
「生れた事なんかないよ。」とまた大口を明く。
オフヒリヤは嚴然となつて、
「そんな返事のしかたをするものではない。御前に戯つて居るのではないよ。何處で生れて、親は何といふ名だか言つて御覽。」
「生れた事なんかないンだ」と力を込めてトブシイは繰返して「父爺も御母も何も無いンだ。大勢一緒に山師に飼はれて、アント・スーッていふのが世話をして居たンだ。」
トブシイは眞劍であつた。ジエンは笑つて、
「そんなのが澤山坐います。山師が澤山子供の黑奴を買ひ込んで市場へ出すやうに育てさせるンです。」
「今迄の御主人の許にどれ程働いて居たのだへ。
「知らないよ。」
「一年か、もつと多くか、もつと少なくか。」
「知らない。」
「奥樣、こんな下等の黑奴には分らないンで、時といふ事を知らないのですから、一ヶ年と言つても分りません。自分の年だつて知りません。」とジエンが言つた。
「神樣といふもの丶事を聞いた事があるかい。」
トブシイは不思議さうな顏をしたが、相替らず鹵を見せた。
「誰が御前を作つた。」
「誰だか知らない」とハ、、と笑つた。餘程可笑しい事と思つたらしく眼にも笑を含んで、
「生えたんだらうよ。誰も作つたんぢやあるまい」
「御前、縫ふ事を知つて居るかい。」とオフヒリヤはもちつと手近い事を尋ねやうと思つて、問うた。
「うゝん。」
「何が出來る？　今までの御主人の許で何をして居た。」

「水を酌んだり、御皿を洗つたり、ナイフを磨いたり御給仕をしたり。」
「御主人は優しくして呉れたかい。」
「さうだらうよ」と答へてトプシイは狡猾くオフヒリヤを熟視した。
オフヒリヤは立ち上つた。セント・クレーアは彼女の椅子の後に倚れてゐたが、
「どうです。手入らずの土地でせう。貴女の思想を御蒔きなさい。抜き取るやうなものはあんまりない。」と言つた。
トプシイはオフヒリヤの所有と家内中の者に認められて、臺所では優しくしてやるものもないので、オフヒリヤは自分の室内で、此黒女を教へたり働かせやうと決心した。女中達が手傳ひませうといふのさへも拒絶して自分で氣に入るやうに、寢床の用意をしたり、室の拭き掃除をしたりしてゐた、オフヒリヤが、その仕事をトプシイにさせやうといふのは、餘程獻身的行爲であつたに相違ない。オフヒリヤは翌朝トプシイを自分の室へ運れて行つて、嚴かに寢床を整頓する術を授け初めた。トプシイはと見ると、自慢にしてゐた三ッ組みの尻尾めいた髪は奇麗に短かく切り摘まれ、清らな着物を纏ひ、糊のきいた前掛を締め、恭しくオフヒリヤの前に立つて、葬儀に相應はしいやうな眞面目な顔をしてゐた。
「さあ、私の寢床の拵へかたを教へるから。私は大變八ヶ間敷いのだからやり方をちやんと覺えなくてはいけないよ。」
「はい」とトプシイは吐息と共に答へて、情なさうに本氣で見て居た。
「よく見て御出で。これが敷布の緣だよ。こつちが表で、こつちが裏だろ。覺えられるかい。」
「はい」と吐息ながらにトプシイは答へた。
「それから、下へ敷く敷布は長枕の下へ持つて來て——かう……而して褥の下へ奇麗に打り込むの……ようく平らに——かう——ね、分つたかい。」

「はい」とトプシイは一心に注意して居た。
「けれども、掛ける敷布はかういふ風にして褥の下手へ緊かりと折り込んで……かう……下手へ狹い方の縁をやつて……」
「はい。」と前の通りにトプシイは答へた。—が—オフヒリヤが手工に夢中になつて脊中を向けて居る間に、新弟子は傍にあつた手袋一揃と、リボン一筋とを手早く取つて、巧みに袖の中へ押込み前の如くに手をちやんと重ねて立つて居た。
「さ、トプシイ。御前やつて御見せ。」とオフヒリヤは寢具を取外して、自からは席に着いた。
トプシイは、嚴肅に巧妙に業をした。敷布を平らにし、皺を伸して、眞面目にやる處はオフヒリヤをも滿足させる程であつた。併し、運惡くもう終といふ頃にリボンの一端がトプシイの袖から垂れ下がつて、オフヒリヤの目に入つた。
オフヒリヤは直に
「之は何だい。此惡者！　之を盜んだらう。」と言つて、トプシイの袖からリボンを曳き出しても黑女は少しも困つた樣をしなかつた。唯驚いたといふ風で、無邪氣に平氣で眺めて居た。
「あれ、御前樣のリボンだね、どうして私の袖に引掛かつたらう。」
「トプシイ！　虛言をお吐きでない。自分で盜んで置いて。」
「盜みやしないよ。眞實に。今の今まで見もしなかつたんだ。」
「トプシイ、虛言を吐くのは惡いといふ事を知らないか。」
「虛言を吐いた事はない。ほんとの事を言つて居るばつかりで他の事なんか言ひはしない。」
「トプシイ、そんなに虛言を吐くと擲るよ。」
「一日中擲つて居たつてそれよりいふ事はないや。」と泣き崩れて、「見た事もないのに。必然袖に引掛つッたんだ。御前樣が寢床の上に置いたのが敷布に搦らまつて、己の袖に入つたんだ。」(續く)